

# 幼兒の病氣の見分け方

醫學博士 青 木 醇 一

學齡前の幼兒は未だ身體の抵抗力が十分でない、殊に呼吸器や消化器官が弱い、随つて學齡兒童に比して呼吸器のカタルや消化不良症なきが遙かに多い、それに小兒に特有な種々な傳染病は離乳後から學齡前までが最も感じ易い時期である。斯様に幼兒は病氣に冒され易いからその保育に當つては特に健康に注意し成る可く病氣に冒されないやうに努めることが最も肝要であるが、萬一病に冒された時は一刻も早く之を見出し適切な處置をさるやうにしな

ければならぬ。しかしそれには幼兒の健否の見分け方を知らなければならぬ。又病の輕重を正しく判斷し得る丈の鋭い觀察眼がなければならぬ。人の健否の見分け方又は病の輕重の判斷は決して醫師にのみ必要な事柄ではない、誰にでも同じやうに必要な知識でもあり又大切な事柄でもある。勿論病氣の的確な診斷には特別な醫學上の知識と技能

が要るが、單に幼兒の健否を察し又は病の輕重大體の判斷には決して専門の知識や特殊の技能を要するものではない、極めて簡單に殆んゞ常識的に之を判斷する事が出来るのである。以下その見分け方に就て特に注意すべき二、三の點を擧げて見やう。

**幼兒の顔貌。**幼兒の健否を見分けるには第一にその顔貌に細心の注意を拂ふことが大切である。喜怒愛樂の情がよく人の顔に現はれると同様に人の健否や病の輕重が屢々その顔貌に現れる。殊に大人と異つて極めて正直な幼兒では僅かの身體上の故障も直ちに顔に表はれることが多い。例へばさか痛みのある時なき直ちに顔に現はれることは誰でも知つてゐる。幼兒の顔貌で最も注意すべき點は眼である。大人のやうに口で明らかに病狀を語るこゝの出来ない幼兒もその眼は口よりも遙かに雄辯に身體上の故障

や病の輕重を示すこゝが決して少くない。健康な幼児の眼はいつも美しく輝いてゐる、眼の輝きに僅かでも曇りを生じたなら健康上に障礙があるものと考へなければならぬ、病が重い程又その性質が悪い程幼児の眼は輝きを失つてくる、例へば腦膜炎、腸チフス、赤痢、疫痢又は重い消化不良症なきになるこゝ幼児の眼はドンヨリと曇つてくる、専門家ならば此の眼の色丈からほゞその病氣が診斷されるこゝさへある。

**皮膚。**顔の表情と共に最も人の眼につき易いのは顔色である、顔貌と共に幼児の顔色を讀むこゝが大切である。顔色の悪いとき、先づ健康上の障礙が考へられる、日常の生活状態が非衛生であるやうな場合、例へば日光に十分浴さないとき、食物が特に不適當で榮養不良な時なき顔色は蒼くなる、潜伏性の結核や寄生蟲なきのために顔色の蒼白なきこゝもある、その他胃腸障礙で血色の悪くなるこゝも少くない。顔色が平素と異つて特に紅いこゝがある。これは多くは急に發熱した時に見る一つの現象である、直ぐ體温を測つて見る必要がある。

皮膚に就ては單に顔色のみではない、全身の皮膚の状態に注意すべきであるが、幼児では殊に皮膚の發疹の見方が大切である。麻疹、猩紅熱、水痘、風疹なき何れも幼児には日常極めて多い病氣であつて、しかもそれゝ特有の發疹の現れる病氣であるから發疹の状態を心得ておくこゝも無益ではない。麻疹は丁度赤インキを吹きかけたさても云ひたいやうな赤い小さな發疹が頭の頂上から足の先きまで全身に現れる、猩紅熱は稍々之に似てゐるが個々の發疹が遙かに之よりも小さく皮膚面に密集してゐる、そして大體全身に出るが顔には通常見られない、風疹は麻疹の發疹と酷似してゐる、水痘は稍々赤味をもつた小さな水疱が全身所々に出来る、初めは極々小さな發疹であるが二、三日目には小豆大程になり内部に透明な液體を含むやうになる。かやうに幼児の發疹性の傳染病では各病氣によりその發疹の状態はそれゝ特有である、随つてその形、分布状態、色なきを精密に觀察するこゝに因つて誰にもほゞ病氣の推定がつく筈である。

**食慾。**幼児の健否の判斷にはその食慾の如何が又極めて

て大切な點である。食慾のよい小兒は先づ健康を見てよい、日常食慾の特に少い小兒は病氣でないにしても極く強壯でないことは確かである、發育盛りの幼兒はよく食べるのが生理的である、身心共に健全な幼兒ならば何を食へても美味い筈である、食物に對する好惡の甚しい幼兒は眞に健康とは云はれない。日常食慾のよい幼兒がこの數日來食慾が少いとか又は今日に限つて著しく食慾がないといふやうな際にはその原因を十分考へなければならぬ。又同じく病氣の際でも食慾に影響の少い時と多い時とある、例へば咳嗽と發熱に悩んでゐる、しかし食物はよく食べる、かやうな際は通常單純な感冒なきに因るこゝが多い、従つて暫く家庭でその経過を見てよい、しかし同じ程度の咳嗽と發熱でも全く食慾のない場合は重いものを見一應醫師の診察を乞ふ必要がある。胃腸障碍では一般に食慾は減るが特に幼兒の胃腸病では食慾の如何によつて容易にその輕重を察するこゝが出来る。

**氣分。** 身體の健否は直ちに幼兒の氣分に關係してくる、幼兒が元氣で、愉快に戸外に遊んでゐるならば通常健康と

判斷される、しかし常に似ず元氣もなく、氣分のすぐれない時はこゝか身體に故障がないか十分注意を拂はなければならぬ。病床に臥してゐる幼兒でも同じである、比較的元氣で玩具なき弄んだり又は頻りにお話をせざるやうなら病氣は左程重くない、反之玩具にも興味がなく又お話にも關心がないやうなら病氣は決して軽く見るこゝは出来ない。

以上述べ來つたやうに幼兒の顔貌、皮膚の状態、食慾の良否又は氣分の如何なきを仔細に觀察すれば幼兒の健否、病の輕重はほとゞ之を知ることが出来る、しかし更に明確に又具體的に健康状態の如何を知るには體溫、脈搏及呼吸の状態を知ることが必要である。

**體溫の測り方。** 人の體溫は寒暑にかゝらず常に一定してゐるこゝは云ふまでもない、そして健康時には腋下で測つて三十六度と三十七度の間である。通常朝は稍々低く三十六度二、三分、午後はやゝ高く三十六度六、七分が普通である、この溫度は大人でも小兒でもほとゞ同様であるが人によつて多少の相異は免れない、例へば健康な小兒が朝な

さ三十六度に達しないこともある、しかし三十七度を越えるのは何等か障碍のある場合である。かやうに健康時には

體溫はほん一定してゐるがある種の病氣では著しい變化を起してくる、そこで健否を判断するに體溫を測つて見る必要が屢々ある。體溫を測るには普通腋下で測るが幼少な小兒では時に股間が便利なきこともある、體溫は食後や運動後には多少昇るから成る可く食前、安靜な時に測るがよい、又汗で腋下が濕れてゐるに體溫器の水銀の入つてゐる部分が濕れるので、正しい體溫まで昇らないことになるから十分汗を拭つてから體溫器を挿む必要がある。大人では體溫を測ることは容易であるが幼少な小兒では永く體溫器を挿んでおくことを厭ふから成る、可くあの小型の一分計又は二分計といふやうな短時間で測ることの出来る敏感なものを用ひるが便利である。體溫は單に熱の高さのみが必要ではない、一日中の體溫の動搖や日々の體溫の變化を見るこゝが大切である、それ故熱のある病兒の體溫を測るには少くも朝夕二回測らなければならぬ、しかも日々凡そ一定した時刻に測つて之を書きこめて置くがよい、出來

得るならば體溫表に曲線で示しておけば更によい、之に因つて熱の状態が一目瞭然と判る。

**脈搏の測り方。**體溫を知るこゝが必要であるに共に脈を見るこゝも大切である。脈を見るには通常手首のこゝで見る、そこでは橈骨動脈が比較的皮膚の表面に近く走つてゐるのでその搏ち方が見易いのである。脈は運動後や神經の興奮してゐる時なき特に多くなるから身心共に安靜な時に見なければならぬ、脈を見るには第一にその數を數へる、つまり一分間に幾つ打つかを見るのである。時計を見ながら丁度一分間數へてもよし又三十秒數へて之を二倍してもよい、一度で判然しなかつたなら幾度か繰り返すがよい。次に大きく強く打つか又は小さく微弱であるかなども注意すべきであるが之には多少の熟練が要る。小兒の脈の數は大人のよりは多い、幼稚園期の幼兒では八五乃至九〇位である、尤も之は幼兒によつて可なり相異がある。脈の數は熱のある病氣ではいつも多い、そして通常熱の高さに並行する。幼兒の顔色がいつになく赤い、脈を見るに數が著しく増してゐる、かやうな時たゞへ體溫器が手元にな

くも脈搏數から熱のあることはほと判る。幼兒の胃腸障碍では熱が餘らない時でも特に脈の多いのが特徴である。しかして病氣の重いほど脈は多いのが通例である、それ故幼兒の胃腸障碍では脈の數でほとその輕重が判断される、重症消化不良症や疫痢なきの際には脈搏は數へきれぬ程速くなる。

**呼吸。**呼吸を見ることも亦體溫、脈搏に次で大切なことである。呼吸に就てはその數とその状態を注意しなければならぬ。呼吸數は幼兒では二〇乃至二五位である、呼吸數を數へるには胸部又は腹部に軽く手を當てておけば呼吸毎に胸部や腹部の動くので判る、肺炎などで特に呼吸の忙しい時は近くでよく之を聞きこることも出来る。熱のある時には一般に呼吸數は多少増すが之は脈搏のやうに著しく増すやうなことはない、氣管枝カタルや肺炎なきのやうに呼吸器の病氣では呼吸數は特に多くなる、随つて是等の病氣にあつては呼吸數の多少でほとその輕重を判断するここが出来る。呼吸は數のみでなくその状態をよく見ることも肝要である、靜かで規則的で落ちついた呼吸の仕方

はよいが不規則であつたり呼吸毎に鼻翼が動いたり胸が波を打つやうに動くのは警戒しなければならぬ。疫痢や重症消化不良症なきになるに幼兒が折々溜息のやうな深い呼吸をするが是等も一つの悪い症狀である、喉頭デフテリ―や急性喉頭カタルでは急に劇しい呼吸困難の狀を呈してくることがある、注意すべきことである。

呼吸數は脈搏及體溫と共に同一體溫表に記し一見して體溫、脈搏、呼吸の有様が判るやうにするがよい、之によつて幼兒の健否又は病の狀態が正しく推定されることが少くない。